１　べと病

A 発生生態

１　葉や根が侵されるが通常は葉の発生が多い。葉では、初め不明瞭な黄緑色の斑紋、後に多角形で灰白色の病斑を生じ、裏面に灰白色で粉状の菌叢を生じる。根に発生した場合、黒褐色で不定形の病斑がカスリ状に表れる。
２　晩秋および春期の低温多湿時に発生が多い。密植などにより通風採光が悪いと発病を助長する。
３　被害植物の組織中の菌糸や卵胞子が、次作の伝染源となる。

B 化学薬剤以外の防除方法

１　間引きは早めに行い、通風採光を良くする。
２　適正な肥培管理を行う。
３　発病葉の処分を行う。

C 薬剤防除のポイント

発病しやすい時期は発生に注意し、発病初期から薬剤防除を行う。

２　萎黄病

A 発生生態

１　主に根が侵されるが、全身的に症状を生じる。被害根は灰白色を呈し、道管が侵されるため断面は黒褐色のリング状に変色する。葉では下葉から黄変し、萎ちょうして枯死する。
２　高温期に発生が多いが、は種後１か月の平均地温が２５℃以上のときに被害が大きくなる。
３　病原菌は他のアブラナ科作物にも寄生し生存する。
４　病原菌は被害株の組織とともに土中に残り、土壌伝染する。また、種子伝染する。

B 化学薬剤以外の防除方法

１　耐病性品種を栽培する。
２　連作を避け、多発ほ場では３～４年間アブラナ科以外の作物を栽培する。
３　秋作ではできるだけ遅まきする。
４　被害残さの処理などほ場の衛生管理に努める。

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

３　根腐病（亀裂褐変症）

A 発生生態

1　幼苗地には地際部に褐色のややへこんだ病斑を生じ、苗立枯を引き起こす。生育中に侵されると、根の表面に円形や不整形の亀裂褐変症状を生じる。
2　主に夏ダイコンで発生が多い。特に多雨期に肥大～収穫期を迎える作型で被害が多い。
3　連作すると年々被害が増大する。
4　病原菌は被害残さや菌核などで土壌中に残り、伝染源となる。

根部の亀裂褐変症状

B 化学薬剤以外の防除方法

1　連作を避ける。
2　ほ場の排水を良くする。
3　被害残さの処理を行う。

４　黒斑細菌病

A 発生生態

１　主に葉や根頭を侵す。葉では初め水浸状の小斑点を生じ、後に周縁が明瞭な褐色の病斑となる。根頭では初め灰色の小斑点を生じ、次第に黒変して不整形の斑点となる。

２　ダイコンの他ハクサイ、キャベツにも発生する。病原細菌が風雨等によって飛散し、作物の自然開口部や傷口から侵入する。

３　春と秋に発生が多く、温暖多雨のとき多発する。

４　早まきや砂質土で発生が多い。また、生育が衰えたときに発生が多くなる。

５　病原細菌は、種子や土壌及び被害植物について越冬して伝染源となる。また、土壌中では１年以上生存する。

B 化学薬剤以外の防除方法

１　連作を避け２年輪作をする。

２　早まきを避ける。

３　肥料切れしないように肥培管理を行う。

C 薬剤防除のポイント

発病期には予防防除を徹底する。

５　軟腐病

A 発生生態

１　本病に侵されると、初め水浸状となり、後に軟化腐敗して特有の悪臭を発する。
２　一般に夏期に発生が多いが、春・秋にも温度の高いときには発生する。また、降雨が多いと多発する。
３　病原細菌は降雨のときに土粒とともに飛散し、傷口や食害痕から侵入する。
４　病原細菌はきわめて多犯性であり、ハクサイ、ジャガイモ、ネギなど１００種類以上の作物を侵す。

B 化学薬剤以外の防除方法

１　連作を避ける。
２　ほ場の排水を良くする。
３　被害株を処分する。

C 薬剤防除のポイント

発病期には予防防除を徹底する。

６　ウイルス病

A 発生生態

１　モザイク病は、カブモザイクウイルス（ＴｕＭＶ）、キュウリモザイクウイルス（ＣＭＶ）、カリフラワーモザイクウイルス（ＣａＭＶ）によって引き起こされる。ウイルスはアブラムシ類により伝搬される。
２　幼苗期に感染したものほど被害が大きくなる。
３　品種により耐病性にかなりの違いがみられる。

B 化学薬剤以外の防除方法

１　耐病性品種を選ぶ。
２　障壁作物を間作する。
３　プラスチックシルバーフイルム等によるマルチ栽培を行う。
４　ほ場周辺の雑草は媒介虫の増殖源となるため、除草を行う。

C 薬剤防除のポイント

媒介虫の防除(アブラナ科虫害の項を参照)。
ＴｕＭＶ、ＣＭＶ、ＣａＭＶ：アブラムシの防除を行う。

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。